

感情の名詞を用いた文の意味構造

佐 藤 規 祥

1. 本論では、「感情の状態」を示す名詞を述語にした統語構造が、どのような意味論的制約の下で成立し得るのかについて考察する。はじめに、統語レベルにおける意味構造の役割に触れ、そのあと具体的な問題点を検討する。

2. 文の統語構造の類型は、それを成立させている述語の文法形式の特徴によって、人称文/無人称文、能動文/受動文などのように分類される。このように形式的な特徴に基づいて、統語構造を類型化することは、互いに対立している文に特徴的な意味の相違を知るのに役立つ (Цейтлин 161; Золотова 1970: 180)。例えば、次の二文は、それぞれ人称文 (主格主語+形容詞述語) に対する無人称文 (与格+述語副詞) という点で形式的に対立している。

- (1) Она грустна. (人称文) 「彼女は悲しげだ」
- (2) Ей грустно. (無人称文) 「彼女は悲しい」

更に(1)の形容詞述語の文に対して、(3)の動詞述語の文 (主格主語+動詞述語) が形式的に対立している。

- (3) Она грустит. 「彼女は悲しんでいる」

上記の三つの文は、Zolotova (1987: 684) の主張するように、統語構造は異なっているが、意味内容の点では『同義 синонимичность』であると考えられている。また単に文法形式において対立しているのではなく、微妙な意味の対立も同時に存在している。このような文のレベルでの意味の対立は、個々の語彙的意味の相違が関係しているというよりは、統語レベルで機能している意味の特徴が実現させている。

このように統語レベルで意味の対立する文は、必ずしも形式上の相違を前提としない。そのような意味の対立は、一般に次のような文法的に同型の構造の文 (主格主語+動詞現在三人称单数) においても見られる。

- (4) Мать волнуется. 「母は興奮している」
- (5) Море волнуется. 「海は波立っている」

これら二つの文が、語彙的意味の相違とは別に、統語レベルで異なる意味の

佐藤規祥

要素から形成されているという考え方は、それぞれの文が同じ文法構造になるように、別の形式の文で表した場合に意味を持つ。Золотова (1982: 206) の例を参考にして、次の(6)(7)の文を対比してみたい。

- (6) Мать в волнении. 「母は興奮している」
 (7) *Море в волнении.

例文(6)は V+前置格形の名詞述語から形成され、(4)と同義の適格な文である。他方、(5)の文を同様の形式で表した例文(7)は不適格になる。これは、それぞれの主語の名詞が示す意味の相違が、文の適格性に影響を及ぼしているからと考えられる。

このように適格な文の成立には、その文法構造と意味構造とが重要な役割を果たしていると言える。これについては、これまで繰り返し議論されてきたが、具体例に則した研究の進展が望まれている (Апресян 1971; Золотова 1970, 1982, 1987; Цейтлин)。

3. ここでは、先の例文(6)の [名詞主格+V+名詞前置格] 型の名詞述語を用いた文を議論に取り上げたい。この文には、Цейтлин, Золотова (1988) から分かるように、様々な意味の名詞が現れる。中でもここで検討の対象とする文の型は、主格主語の名詞が感情の主体を表し、述語の前置格形の名詞が「感情の状態」を表す事例である。先の例文(6)と同じ意味構造の文には、他にも以下の(8)①～⑦の通り、多くの感情の状態を意味する名詞（以下においては単に感情の名詞と称する）が述語として現れる。¹

- (8) ① ярость 「激怒」 ② бешенство 「激怒」 ③ возмущение 「憤慨」
 ④ обида 「立腹」 ⑤ раздражение 「癪癪」 ⑥ ужас 「恐怖」 ⑦ удивление
 「驚嘆」 ⑧ смущение 「当惑」 ⑨ изумление 「驚愕」 ⑩ восхищение 「恍惚」
 ⑪ умиление 「感動」 ⑫ радость 「歡喜」 ⑬ разочарование 「失望」
 ⑭ восторг 「感激」 ⑮ испуг 「驚愕」 ⑯ волнение 「興奮」 ⑰ тревога 「不安」
 ⑲ беспокойство 「心配」 ⑲ увлечение 「夢中」 ⑳ страх 「恐怖」 ㉑ печаль
 「悲嘆」 ㉒ отчаяние 「絶望」 ㉓ негодование 「憤怒」 ㉔ досада 「遺憾」
 ㉕ горе 「悲哀」 ㉖ тоска 「憂愁」 ㉗ любовь 「恋愛」

上の(8)における V+前置格形の述語を形成する①の名詞 ярость 「激怒」には、対応する動詞 разъяряться 「激怒する」が存在する。従って、上の(8)①～⑦は例文(4)と(6)の関係と同様に、以下の(9)①～⑦のように順に対応する動詞を述語にした同義の文で表すことが可能である。

感情の名詞を用いた文の意味構造

- (9) ① разъяряться ② беситься ③ возмущаться ④ обижаться
 ⑤ раздражаться ⑥ ужасаться ⑦ удивляться ⑧ смущаться
 ⑨ изумляться ⑩ восхищаться ⑪ умиляться ⑫ радоваться
 ⑬ разочаровываться ⑭ восторгаться ⑮ пугаться ⑯ волноваться
 ⑰ тревожиться ⑱ беспокоиться ⑲ увлекаться ⑳ страшиться
 ㉑ печалиться ㉒ отчаяваться ㉓ негодовать ㉔ досадовать ㉕ горевать
 ㉖ тосковать ㉗ любить

このように、意味の上で対応する感情の名詞と動詞の両者が存在すれば、それぞれを述語とした同義の文が規則的に成立するはずである。しかしながら、それに反する例は少なからず見出される。例えば、以下のように動詞 сочувствовать 「同情する」を述語にした文(10)と同義で、対応する名詞 сочувствие 「同情」を用いた文(11)は、不適格になってしまふ。

(10) Он сочувствует. 「彼は同情している」

(11) *Он в сочувствии.

このように感情の名詞を用いた文であっても、次の①～⑯の名詞を用いた場合は不適格であるとされる。²

- (12) ① сочувствие 「同情」 ② сожаление 「残念」 ③ сострадание 「同情」
 ④ грусть 「憂鬱」 ⑤ трепет 「不安」 ⑥ гордость 「誇り」 ⑦ робость 「臆病」
 ⑧ ненависть 「憎悪」 ⑨ ревность 「嫉妬」 ⑩ зависть 「羨望」 ⑪ трусость
 「臆病」 ⑫ жалость 「残念」 ⑬ боязнь 「恐怖」 ⑭ стыд 「恥」

このように適格な文を成立させる名詞(8)①～㉗と比べると、不適格な文にする名詞(12)①～⑯は少ないが、単なる例外とは認められそうにない。

以上のように感情の状態という共通の意味を持つ名詞でありながら、ある場合には適格な文を成立させるにもかかわらず、別の場合には不適格の文になってしまうのは何故だろうか。それが単に個々の語彙レベルで慣用的に定着しているだけならば、構造的な要因は関与していないであろう。しかし、名詞の形態には直接的には現れない区別が、対応する動詞の特徴には見出せる可能性はある。以下においては、問題の文の適格性を左右する要因について、形態論的および意味論的な観点から検討したい。文の適格性に着目することは、統語構造が単に形式的な法則だけによって成立しているのではなく、構造的に働く意味論的な要因も関係している、ということを示す意義がある。

4. 先の文(4)と(6)とを同義と見做す考え方には、繰り返し提示してきた。そし

佐藤規祥

て、その名詞述語には感情の名詞であっても、表し得ないものが存在することは、Цейтлинによって早くから指摘されていた。だが、そこにどのような制約が働いているのかについては、これまで議論されなかった。

ここでは参考になるのは、Иорданская (1970: 5) の説である。彼女の説によると、感情表現の述語は『感情の状態 чувство-состояние』と『感情の態度 чувство-отношение』とを意味するものが区別される。すなわち、「感情の状態」とは喜び・悲しみ・怒り・恐れ・驚きという狭義の意味での感情を表すものであるのに対して、「感情の態度」とは、愛情・憎しみ・尊敬・軽蔑・同情・信頼などという感情を態度に表す語であるとした。その分類によると、「感情の態度」を表すとされる сострадание「同情」、ненависть「憎しみ」を前置格形の述語にした文は、先の例(12)(3)(8)に示した通り、不適格になるようである。これに対して、「感情の状態」を表すとされる多くの表現が例(8)(9)に見られる通り、適格な文を成立させる。しかし、「愛情」を表す名詞 любовьは、(8)(27)のように適格な文を成立させる一方で、「悲しみ」の意味に分類されている сочувствоватьに対応する名詞は、(11)のように不適格な文になる。

このように、感情を「状態」と「態度」とに二分するという類別の仕方自体は無視できないが、個々の語の分類の仕方は動機付けが明確でないという問題がある。また名詞 боязньと страхは、「恐れ」を意味する類義語であるが、次の通り(13)の文が適格であるのに対して、他方の(14)の文は不適格である。

(13) Он в страхе. 「彼は恐れている」

(14) *Он в боязни.

この様に類義語であっても、統語レベルでは相違が現れるので、意味論的な類別の基準を構造的に明らかにする必要がある。以上の問題点を考慮に入れて、Иорданскаяの類別法を再検討したい。

5. 上述のような統語レベルで現れる適格性の相違は、名詞の語彙的意味の問題ではないと思われるが、対応する動詞には統語レベルで相違が現れる可能性がある。そこで、上の文(13)(14)と同じ動詞を用いて、生格補語（下線部）を付加した文を見てみたい。

(15) Дочь страшится отца. 「娘は父を怖がっている」

(16) Дочь боится отца. 「娘は父を恐れている」

ここで用いられている動詞 бояться, страшитьсяの形態論的相違を見ると、(15)の自動詞 страшитьсяには страшить「怖がらせる」という使役の意味を持つ

感情の名詞を用いた文の意味構造

他動詞が存在するのに対して、(16)の自動詞 *бояться* には同様の他動詞が存在しない。これと同様の、感情の動詞に見られる形態論的な制約について、Ломтев が詳しく分析しており、注目に値する。彼は感情の動詞には、使役の意味を持つ他動詞と対になるものと、ならないものとがあることに着目して、それらの動詞から形成される文を二類に分けた。そこで彼の関心は、使役の意味を表す文の類型を分類することにあったのだが、ここでは便宜上、動詞の形態上の区別を基に類別する。それによると、感情の主体が主格主語に現れる(始発)文からは、次の手順を経て、使役の意味を表す文を形成することができる。まず始発文の補語を主格主語の位置に移動し、次に自動詞を後接辞-ся のない他動詞に換え、そして、もとの主格主語を対格にすると、使役文が形成される。このようにして使役文を形成する動詞を仮に一類動詞と称する。これに対して、動詞の形態論的制約から同様の使役文が形成されないことがある。この場合の動詞を仮に二類動詞と称する。³ 先の文(15)の場合、次の使役文(17)が成立する(下線部は(15)における補語)。

(17) Отец страшит дочь. 「父は娘を怖がらせている」

上の使役文(17)において、主格主語 *отец* 「父」は感情を引き起こす「原因」を意味する名詞であり、感情の主体を示す名詞 *дочь* 「娘」は、常に対格補語として述語動詞に支配される。これに対して、二類動詞を用いた文(16)からは、動詞の形態論的制約のために、同様の使役文は成立しない。他の二類動詞の例をあげると、*ненавидеть* 「嫌う」を用いた文(18)からは、動詞の形態を換えるだけでは使役文が形成されない。名詞の位置を換えるためには、(19)の文のように対応する形容詞述語 *ненавистен* 「嫌い」を用いなければならない。だがこの場合、(19)の主格主語の名詞 *сосед* 「隣人」は、与格の主体 *отцу* 「父」の抱いている感情の直接的な原因とは限らず、むしろ感情の向けられている対象を意味していると言える。

(18) Отец ненавидит соседа. 「父は隣人を嫌っている」

(19) Сосед отцу ненавистен. 「父は隣人が嫌いだ」

このような類別が実際にどのような意義を持つのかについて、Ломтев は議論を展開しなかった。ただ、彼の類別法に従うならば、[名詞主格+B+名詞前置格] 型の文の述語として現れる名詞に対応する動詞(9)①～⑩が一類動詞に相当するものであることが分かった。以下に(9)①～⑩の対応する他動詞を記す。

(20) ① разъярять ② бесить ③ возмущать ④ обижать ⑤ раздражать
 ⑥ ужасать ⑦ удивлять ⑧ смущать ⑨ изумлять ⑩ восхищать

佐藤規祥

- ⑪ умилять ⑫ радовать ⑬ разочаровывать ⑭ восторгать ⑮ пугать
 ⑯ волновать ⑰ тревожить ⑱ беспокоить ⑲ увлекать ⑳ страшить
 ㉑ печалить

上記の例に対して、使役形を持たない以下の二類動詞は、適格な文を成立させない(12)①～⑭の名詞に対応するものであることが明らかとなった。

- (21) ① сочувствовать / сочувствие ② сожалеть / сожаление
 ③ сострадать / сострадание ④ грустить / грусть ⑤ трепетать / трепет
 ⑥ гордиться / гордость ⑦ робеть / робость ⑧ ненавидеть / ненависть
 ⑨ ревновать / ревность ⑩ завидовать / зависть ⑪ трусить / трусость
 ⑫ жалеть / жалость ⑬ бояться / боязнь ⑭ стыдиться / стыд

ただし適格な文を成立させる名詞 (8)㉒～㉗に対応する二類動詞が、次の数例確認される。

- (22) ㉒ отчаиваться / отчаяние ㉓ негодовать / негодование
 ㉔ досадовать / досада ㉕ горевать / горе ㉖ тосковать / тоска
 ㉗ любить / любовь

以上の例から、確かに(8)の文を成立させる名詞が、対応する動詞の形態論的特徴と関係があることは疑いなさそうである。けれども、自動詞が使役の意味を示す他動詞を対に持つことと、対応する名詞が B + 前置格形の述語として文を成立させることとの間には、直接的な関係があるようには思えない。それに、二類動詞に対応する名詞にも同様の述語になるもの、(8)㉓негодование, ㉔ досада, ㉖тоска なども存在するので、動詞の形態論的な特徴だけが、名詞の統語レベルでの制約に関係しているのではなかろう。そこで、一類動詞がどのような共通した特徴を他に持つのか、そして、二類動詞に働いている形態論的な制約にはどのような要因が他にも関係しているのか、更に考えてみたい。

6. 一類動詞と二類動詞とを類別する特徴として、他にも完了体の有無という点が指摘できる。すなわち一類動詞においては、完了体と不完了体の対立が認められるが、二類動詞においては一部の例外を除くと、その対立が認められず、不完了体だけが現れるのである。そして Гловинская (92) によれば、この場合の完了体動詞は、「(ある感情) になる、～し出す」という『状態の始発』の意味を示している。先の(20)の一類動詞の完了体を以下に記す。

- (23) ① разъярить ② взбесить ③ возмутить ④ обидеть ⑤ раздражить
 ⑥ ужаснуть ⑦ удивить ⑧ смутить ⑨ изумить ⑩ восхитить

感情の名詞を用いた文の意味構造

- (11) умилить (12) обрадовать (13) разочаровать (15) испугать (16) взволновать
 (17) встревожить (18) обесспокоить (19) увлечь

一類動詞のうちで、不完了体のみが現れる語は、次の3例である。

- (24) (14) восторгать (20) страшить (21) печалить

これに対して、二類動詞には不完了体のみが現れる。その中には(8)(23)～(27)の適格な文を成立させる名詞に対応するものが含まれる。

二類動詞のうちで不完了体と完了体の対がある語は、次の4例である。

- (25) (10) позавидовать (11) струсить (12) пожалеть (22) отчаяться

ただし上の4例は、一類動詞のように完了体が状態の始発を意味することはない。

以上のように、感情の状態を意味する動詞は、体と態の特徴について一類と二類に類別される。

7. 動詞の体の区別と関連して、名詞の場合にも統語レベルで興味深い現象が観察される。すなわち一類動詞に対応する名詞は、Цейтлин (167) が指摘するように、прийти в + 対格形「(ある感情)になる、～し出す」という状態の始発を表す統語構造を形成する。この構造はちょうど、対応する完了体動詞で表された文と近い意味になる。例えば、次の例文(26)と(27)を対比する。

- (26) Он пришёл в ярость. 「彼は激怒し出した」

- (27) Он разъярился. 「彼は激怒してしまった」

この構造を形成する名詞は、次の一類動詞に対応するもの①～⑬である。

- (28) ① ярость ② бешенство ③ возмущение ④ обида ⑤ раздражение
 ⑥ ужас ⑦ удивление ⑧ смущение ⑨ изумление ⑩ восхищение
 ⑪ умиление ⑫ радость ⑬ разочарование

従って上記の名詞は、状態を示す不完了と状態の始発を示す完了という、次のような統語構造の対を形成していることになる。

- (29) Он был в ярости. / Он разъярялся. 不完了体 (状態)

- (30) Он пришёл в ярость. / Он разъярился. 完了体 (始発)

ただし、このような完了の意味を示す文(26)の形成は、一類動詞に対応する名詞の全てに可能である訳ではない。以下の名詞を用いた文は Апресян (1971: 28), Цейтлин (168) 及びロシア人インフォーマントによると不適格であるとされる。

- (31) (15) испуг (16) волнение (17) тревога (18) беспокойство (19) увлечение

佐藤規祥

(20) страх (21) печаль

これらの名詞が受け入れられないのは、この構造の文では、Апресян (1971: 28) の主張するように、感情の度合いが『強い』ことが表現されるので、その意味で不自然に感じられる語が用いられないからであろう。

他方の二類動詞に対応する名詞(12)(1)～(14)を用いた文は、(8)の文を成立する名詞(24)～(27)も含めて、いずれも不適格になる。例えば次の文(32)は不適格になる。

(32) *Он пришёл в сочувствие (досаду, тоску).

ただし、次の二類動詞に対応する名詞だけは、適格な文(33)を成立させる。両者ともに(8)の文を成立させる名詞(22)(23)である。

(33) Он пришёл в отчаяние (негодование). 「彼は絶望（憤慨）した」

どちらの名詞も強度の感情を意味し得るので、自然な表現として受け入れられるのであろう。

以上のことから言えることは、感情の名詞は対応する動詞に体の対があれば、完了と不完了の意味を示す統語構造の対(29)(30)を成立させることが可能であるが、その動詞に不完了体しかなければ、完了だけでなく、不完了の意味を示す統語構造をも成立しないということである。しかし、このような形式的な制約だけでは、(31)(33)のような事例の説明はできない。実際には、個々の語の持つ意味の役割も強く働いているからである。

しかし何故、二類動詞に対応する名詞が、不完了体動詞で表した文と同義の名詞述語の文を成立させることができないのか、という疑問がまだ残る。またそれだけではなく、二類動詞に対応する名詞(8)(22)～(27)であっても、以下の文(34)を成立させることにも配慮する必要がある。

(34) Он в отчаянии (негодовании / досаде / горе / тоске / любви).

そして、これらの名詞が一類動詞に対応する名詞と、どの点で共有する意味を持ち得るのかについて説明しなければならない。

8. そこで、原因の意味を表す前置詞 отあるいは изと感情の名詞との結合の仕方を調べたところ、これらの名詞を二分する現象があることが分かった。つまり、一類動詞に対応する名詞は、次の(35)のように前置詞 отとのみ結合して、「～のために」という原因の意味を表す。

(35) плакать от радости (Апресян и др. 1997: 145) 「喜びのあまり泣く」

このような例は、次の名詞に見られる。

(36) ① ярость ② бешенство ⑤ раздражение ⑥ ужаса ⑦ удивление

感情の名詞を用いた文の意味構造

- (8) смущение (9) изумление (10) восхищение (11) умиление (12) радость
 (14) восторг (15) испуг (16) волнение (19) увлечение (20) страх

上記の名詞は**из ярости* (Апресян и др. 1997:145) のように前置詞 *из* と結合することはない。ただ、稀に次の様な表現も可能な場合がある。

(37) из страха написать донос (Апресян и др. 1997) 「恐怖から密告を書く」

Апресян (1997 : 145) の解説に従うと、前置詞 *от* と結合する名詞は、感情の主体の意志や理性によって制御されずに、無意識的にまたは反射的にひきおこされた感情を表すものである。これに対して、前置詞 *из* と結合する名詞は、感情の主体の意志や理性による制御を受けて、意識的にも持続し得る感情を表すものである。つまり、前置詞の選択は名詞の表す意味にいわゆる「意志制御 контролируемость」の意味が標示されているか否か、に関わっている。この点に配慮して以下の例を見てみる。

次の二類動詞に対応する名詞は、前置詞 *из* とのみ結合し、*от* と結合することはない (例 **заплакал от сочувствия* — Апресян и др. 1997: 145)。

(38) Он сказал это из сочувствия к вам. 「彼はあなたへの同情からそれを言った」

同様の例は次の名詞に見られる (番号は例(12)を参照)。

- (39) ① сочувствие ② сожаление ③ сострадание ⑥ гордость
 ⑧ ненависть ⑩ зависть ⑪ трусость

ただし、次の二類動詞に対応する名詞は、*от* と *из* いずれの前置詞とも結合する。つまり、名詞には意志制御の標示がとくに固定していないことを示す。

(40) ⑨ ревность ⑫ жалость ⑬ боязнь ⑯ любовь

以上のものに対して、次の名詞は *от* とのみ結合し、意志制御を受けない感情であることを示している。とくに下線部の名詞は(8)の文を成立させるものである点が興味深い。

(41) ㉒ отчаяние ㉓ негодование ㉔ досада ㉕ горе ㉖ тоска ㉗ стыд

以上の例から明らかのように二類動詞に対応する名詞には、意志制御の標示をする場合と、関係のない場合とが存在する。そして、一類動詞に対応する名詞と同様に、意志制御を受けないという意味の標示をする名詞こそが、*B+前置格形の述語として文を成立させるもの*に相当するのである。このように感情の名詞が *от* と *из* のいずれの前置詞と結合するかは、専ら語結合上の法則によって固定しているのではなく、意志制御という意味の標示によって左右されていると言える。

佐藤規祥

これまでの分析を表で簡単に示すと次のようになる。

例	主な意味	可能な語結合				対応する動詞	
		B 前置格	B 対格	OT 生格	из 生格	完了体	類
8 ①～②①	怒り, 驚き, 喜び, 心配	①～②⑦	①② ⑤～⑫⑭ ⑯⑯⑯⑯⑯⑯	①～⑩	⑩	①～⑬ ⑯～⑯	一類 ①～⑬
⑯～⑯	絶望, 憂愁, 悲哀, 恋愛		⑯⑯	⑯～⑯	⑯	⑯	二類 ⑯～⑯
12 ①～⑬	同情, 憎悪, 妬み, 恐れ	なし	なし	⑨ ⑯～⑬	①②③ ⑥⑧～⑬	⑩～⑬	①～⑬

9. 以上の考察から、感情の名詞が B+前置格形の述語として現れる文が、適格であると認められる条件には、次の（I）形態論的制約とより優勢な（II）意味論的制約の二点が指摘される。

(I) その名詞に対応する感情の動詞が、Ломтев の類別による一類の特徴を有しているものである。この場合の名詞を述語とした文は、対応する動詞の不完了体で表した文と同義になる。

(II) 名詞または対応する動詞の意味する感情が、主体の意志制御を受けずに、無意識的にまたは反射的に生じるものである。この条件下では形態論的制約によって排除された二類動詞に対応する名詞もまた、述語として適格な文を成立させることが可能となる。更にこれらの名詞は、原因の意味を表す前置詞 OT と結合する。

最後に統語構造における以上のような形式的および意味論的制約が、互いにどのように関係しているのかについて説明する必要がある。

感情の動詞や名詞が示す意志制御の標示は、文の成立にとりわけ重要な役割を果たしている。主体の意志制御が働く感情とは、外部から反射的に引き起こされた場合である。それゆえに、その感情がひきおこされた因果関係を明示することができ、原因を表す名詞が主格主語となり、使役の意味の動詞が用いられる。こうして反射的に生じた感情は始発を意味する完了体動詞で表される。そして、無意識的に一時的にのみ存続する感情の状態は、不完了体動詞で表される。まさにそのような状態を意味する、B+前置格形の名詞が述語となつて、同義の文を表現することも可能になるのであろう。また、後接辞-ся を伴う自動詞形は、対格を除く様々な格の補語を、時には前置詞を伴って支配し得るが、原因を示すこれらの補語は、必ずしも文を成立させる上で不可欠の

感情の名詞を用いた文の意味構造

要素ではない。従ってこのこともまた、原因を示す語をともなわない〔主格主語+B+前置格〕型の文の適格性を強く支持していると考えられる。

これに対して、主体の意志制御が働き得る感情とは、内面である程度意識的にまたは理性的に起こし得るものである。これは、Иорданскаяの主張する「感情の態度」を示す語と関係付けられる。感情が生じた直接的な原因は不特定であるために、使役の意味を表す他動詞も、感情の始発を意味する完了体も存在しない。このような感情は、抑制することも、意識的に動作を持続することも可能であり、その持続の意味が不完了体動詞によって表される。また、動詞は対格を含む様々な格の補語を、時には前置詞を伴って支配し得る。感情の向けられている対象を示すこれらの補語は、文を成立させる上で主体との関係を示すための必要な要素である。従って、感情の対象を示す補語を伴わない〔主格主語+B+前置格〕型の文が不完全に感じられ、適格性が失われる。

名詞が示し得る意味が、統語構造にどのような制約を加えているかについての議論はまだ十分とは言えない。体や意志制御という動詞に特徴的な意味は、必ずしも動詞にのみ関わるのではなく、それと意味の上で対応している名詞においても重要な役割を果たし、統語構造の適格性に影響していると言える。本論では、以上のこととを明らかにするために、専ら感情の名詞にのみ焦点をあてて考察したが、更にこれ以外の名詞についても検討する課題が残された。

(さとう のりよし・中京大学)

注

¹ ここで分析の対象となる語は、Иорданская 1970 を参考にした。また、用例は科学アカデミー編の辞典（1948-65）の他に、Апресян и др. 1997, Золотова 1988, Цейтлинを参考にした。

² 不適格な用例については、Апресян и др. 1997, Цейтлинの指摘を参考にした他に、ロシア人ネイティヴスピーカー、山崎タチアナ、Светлана Владимировна Ермачкова、Татьяна Юрьевна Кекидзе 各氏のチェックを受けた。この場を借りて、深く感謝の意を表したい。

①～⑯の名詞は、сильный, глубокий, страшныйなどの強意を表す形容詞に修飾された場合には、文の適格性が強まる。

³ Ломтев はそれぞれの文の類型を一類文、二類文と称して区別した。

引用文献

Апресян, Ю. Д. и др. 1997. *Новый объяснительный словарь синонимов русского языка.* Москва: Языки русской культуры.

佐藤規祥

- Золотова, Г. А. 1988. *Синтаксический словарь. Репертуар элементарных единиц русского синтаксиса.* Москва: Наука.
- Словарь современного русского литературного языка. Академия Наук СССР. Т. 1-17. Москва, 1948-1965.

参考文献

- Апресян, Ю. Д. 1971. “Семантические преобразования и синтагматические фильтры.” *Машинный перевод и прикладная лингвистика* 14: 3-43.
- Гловинская, М. Я. 1982. *Семантические типы видовых противопоставлений русского глагола.* Москва: Наука.
- Золотова, Г. А. 1970. “Синтаксическая синонимия и культура речи.” *Актуальные проблемы культуры речи.* Москва. 178-216.
- Золотова, Г. А. 1982. *Коммуникативные аспекты русского синтаксиса.* Москва.
- Zolotova, G. A. 1987. “О листинктивных значениях синонимических конструкций.” *Revue des études slaves* 59.3: 681-86.
- Иорданская, Л. Н. 1970. “Попытка лексикографического толкования группы русских слов со значением чувства.” *Машинный перевод и прикладная лингвистика* 13: 3-26.
- Иорданская, Л. Н. 1972. “Лексикографическое описание русских выражений, обозначающих физические симптомы чувств.” *Машинный перевод и прикладная лингвистика* 16: 3-30.
- Ломтев, Т. П. 1973. “Структура предложений с глаголами эмоционального содержания.” *Славянская филология* 9: 176-87.
- Цейтлин, С. Н. 1976. “Синтаксические модели со значением психического состояния и их синонимика.” *Синтаксис и стилистика.* 161-81.

Нориёси САТО

Семантическая структура предложений с именными предикатами эмоционального содержания

Общеизвестно, что чувства субъекта выражаются либо в личном (Она грустна.), либо в безличном (Ей грустно.) предложении. При этом в личном предложении сказуемое может быть или глагольным (Она волнуется.), или именным (Она в волнении.). Автора статьи интересует тот факт, что наличие глагольного сказуемого не гарантирует наличие соответствующего ему именного сказуемого (Она грустит.: *Она в грусти.). В каком же случае утрачивается параллельность значения между

感情の名詞を用いた文の意味構造

глагольным и именным сказуемым, в форме «в + имя сущ. в предложном падеже»?

В решении этого вопроса оказали значительную помочь работы Г.А.Золотовой и Т.П.Ломтева. Особенno полезным оказалось сделанное Ломтевым разделение предложений, выражающих чувства субъекта, на две группы. Параллельность между глагольным и именным сказуемыми сохраняется, как правило, в случае, когда именной частью сказуемого служит имя существительное, образованное от глаголов первой группы (по классификации Ломтева). Однако по-прежнему остаются исключения, требующие объяснения.

Для объяснения этих исключений, по мнению автора, следует учитывать возможность контроля субъектом чувств, описываемых сказуемым.